

市勢要覧

【人口増加を続ける魅力満彩都市】

# 名取

N A T O R I

3・11から復興へ—安全安心で自然豊かな環境都市として



関上地区沿岸部  
上)平成18年6月 下)平成23年3月  
海岸から最大5.5kmまで進入した津波。  
関上地区では海岸から1km以内の木造  
住宅はほぼ全て流失した



開運橋  
上)平成20年7月 下)平成23年3月  
震災で市登録文化財の開運橋は  
完全に崩落した

緑の山々の連なり、紺碧に輝く海、川のせせらぎ…。名取の美しい自然と安心して暮らすことができる生活環境は、私たちのかけがえのない財産です。東日本大震災の甚大な被害を乗り越え、名取市では、今ふたたび、自然に学び、自然と向き合い、そして自然と共生し発展する都市としての新たなまちづくりを進めています。震災前を上回る人口増加を続ける中、この自然と環境を次代に守り継ぐための新たな取り組みが、市民の手によって進められています。

最大10メートル前後の津波、  
市域28%が浸水、  
沿岸部は家屋全壊の  
壊滅的被害。

平成23年の東日本大震災で名取市では、死者883人・行方不明者41人、半壊以上の建物5000棟以上の被害を受けました。津波による被害が甚大で、死者・行方不明者は大半が津波の被害であり、沿岸部では家屋の全壊が多数を占め、関上地区では海から1km以内の木造住宅はほぼ全て流失。関上・下増田地区の沿岸部は壊滅的な被害を受けました。内陸に侵入した多くの海水は長い期間にわたり、その場に留まったため、多くの瓦礫が流されずに水田内にそのまま残される原因となりました。小塚原地区などの水田の一部は、震災後2カ月経過しても水が引かず、また、農地が海水に浸かったことで、塩害により農作物が育てられないという二重の被害となりました。

希望に満ちて、  
一歩ずつ。

7万4千人の鼓動を、今、チカラに変えて

甚大な被害と深い悲しみをもたらした東日本大震災。全国各地・海外から寄せられた心温まる支援・激励。そのすべてを心に受けとめて、名取市は一歩ずつ、復興の歩を進めています。この地に住まう誇りと喜びをチカラに。震災後にこの地に住まう新しい鼓動を希望に。名取市は、元気に力強く、進化し続けます。

3・11から復興へ—  
安全安心で自然豊かな  
環境都市として

人口増加を続ける  
交流拠点・産業成長都市として

人を育て歴史文化が輝く  
文化交流都市として

健康でいきいきと暮らせる  
住みよさ東北No.1都市として



JR名取駅と駅前広場（東口）

# 震災を乗り越え、 自然と共生し発展する 新たなまちづくりへ。



新たな“開上”のまちなみイメージ—開上港線から名取川方面を望む—



震災後の防災訓練



©陸上自衛隊第10師団第35普通科連隊提供



撮影/名取市社会福祉協議会

## 沿岸部での生活再建・津波からの防衛対策計画のもと、震災復興が着々と進行中。

名取市では、全国各地から、そして世界中から、人命救助・捜索活動、がれきの撤去作業、避難所支援活動などの物心両面にわたる心温かいご支援をいただきながら、懸命に復旧・復興に取り組んでまいりました。

平成25年11月には、発生した約96万トンのがれき処理も終了し、新たな復興まちづくりへ大きく歩を進めています。

震災被害の大きかった沿岸部の開上地区では、土地区画整理事業がスタートし、新たな居住区域の設定や多重防衛・地盤かさ上げ、災害公営住宅・移転先住宅団地の整備など、住民との話し合いを積み重ね、まちづくり協議会での検討を重ねて、新たな復興まちづくり計画を進めています。こうした取り組みの中、水産業復活に向けた水産加工団地の整備なども検討されています。

また、開上地区に次いで被害の大きかった下増田地区においても、4集落の防災集団移転促進事業の取り組みが始まっています。

## 進む市街地整備とまちなか再開発。都市基盤の充実と両立する共助コミュニティと環境保全活動。

名取市の人口は、東日本大震災の影響で平

成23年度には一旦減少したものの、平成24年度以降は、人口増加が続いています。古くから地域コミュニティを重ねてきた地区、土地区画整理事業や大規模開発により形成された山手の住宅地区に加え、平成19年に開通した仙台空港アクセス鉄道沿線的美田園・杜せきのしたエリアは、職住近接の仙台空港臨空都市として人口流入が続いており、まちの成熟度が向上しています。

こうした中、震災で失われてしまった海岸の風景を復活させようと、住民レベルでの海岸植物再生ボランティア活動の動きなども始まっています。

また、平成25年の夏には、震災で中止となっていた環境教育・親子での「ホテル観察会」や「自然観察会」も復活し、私たちが住む郷土の環境を改めて見直す動きも広がりをみせはじめています。

名取市では震災前より、年間20回以上の防災に関する出前講座を開催し、地域単位での自主防災の意識化・組織化を進めるなど、町内会や自治会などを中心に自主的防災への取り組みを活発に行ってきました。東日本大震災を経験してその思いはさらに強く、命を守る行動として、より実働的な地域ごとの防災訓練や共助のコミュニティづくりを積極的に推進しています。



国道4号バイパス



仙台空港アクセス鉄道



愛島台メガソーラー事業

# さらに強く 大きな翼をもつ、 魅力と元気あふれるまちへ。

名取市は、東北の空の玄関口を抱え、恵まれた交通環境を生かし、広域仙台都市圏の副拠点都市として歩んできました。交通アクセスの拡充が進む中で、農林水産・商工のすべての産業を有している産業特性を發揮し、新たな産業活力も生まれています。東日本大震災以降も人口が増加し続けるまちとして、居住機能の充実と産業機能の集積・整備を進め、市全域規模での均衡あるまちづくりに取り組んでいます。都市機能の充実などを図りながら、単なる通過点ではない、居住・滞在空間としても魅力あふれる交流拠点都市の形成をめざしています。



仙台空港



愛島西部工業団地



ETC搭載車専用のインターチェンジ設置箇所図

**広域アクセスの拠点都市。  
仙台空港が所在する、  
世界と直結した  
東北のゲートウェイ。**

仙台空港は、3000メートル滑走路の供用開始、新旅客ターミナルビルや新貨物ターミナルビルの完成、運用時間の延長など東北の拠点空港として整備が進められてきました。平成26年1月現在、国内線8路線、国際線9路線が就航し、年間300万人以上の人々に利用されています。そして現在は、民生活空港運営法による全国初の民営化に向けた取り組みが進められています。民営化の後、宮城県としては30年後には年間旅客数600万人、貨物取扱量5万トンを見据えていることから、世界に開かれた東北のハブ空港としての拠点性はますます強まり、東北地方全体への活性化・国際化にも大きな期待が寄せられています。

また名取市は、JR東北本線、仙台空港アクセス鉄道、高速自動車道が走る広域的アクセスに優れたまちとしても、広域交流を実現する環境が整っています。

**多様な産業集積、新市街地形成。  
豊かな地域資源を有し、  
人口増加を続ける、  
新しい街づくり。**

近年、名取市は、愛島西部工業団地への企業進出、国道・県道沿いへの多様な業種の店舗・事業所の進出が相次いでいます。さらに仙台空港アクセス鉄道沿線のりんくうタウン内には商業拠点が形成されています。平成29年3月完成をめざす仙台東部道路の(仮称)名取中央スマートIC設置により、産業成長都市としてのさらなる飛躍が期待できます。

名取市は、赤貝やセリ、カーネーションなど全国レベルの農水産物をはじめ、地域資源豊かなまちです。震災で甚大な被害を受けた現在、再生をめざしたさまざまな復興への取り組みが進められています。

また、りんくうタウンおよび西部丘陵地への新たな市街地の形成、名取駅前に図書館を核とした新たな市街地再開発事業の取り組みなど、新市街地と既存市街地との融合と補完を図りながら、産業拠点と魅力ある居住・滞在空間としての調和のとれた新しいまちづくりにも取り組んでいます。



館腰遊歩道(道路公園)



西部丘陵地



りんくう市街地

こんなこと、できたらいいね。こんなふうになったらうれしいね。そんな市民の声や思いが形になって、名取市では、さまざまな街なか交流や世代間交流、地域間交流を大切に育んできました。魅力ある生活空間として人口増加を続けるまちづくりの中で、新たな交流の形も生まれつつあります。交流の絆が、古き良き伝統を守り継ぎ発展させる、まちの新しい息吹となって、心豊かで潤いのあるまちづくりの原動力として大きく広がっています。



関上太鼓保存会



子どもホタレンジャー

# 響き渡るふれあいの ハーモニーが、 まちづくりの力に。



農業体験学習



道祖神神楽



熊野堂舞楽



熊野堂神楽



わんぱく交歓研修会



花町神楽発表会

姉妹都市との強い絆。  
“生きる力”を育む、  
子どもたちの体験交流。

昭和48年、北緯38度の同緯度にあることから、海に面した名取市と山に囲まれた山形県上山市の小学生により始まった「海の子山の子交歓会」。両市の小学生が夏は名取市で、冬は上山市で、それぞれの地域を互いに訪れ友情を深めるための交流を40余年続けてきました。この交流がきっかけとなり、昭和53年には両市において姉妹都市の盟約が結ばれました。東日本大震災の影響により一時途絶えた交流は、現在「わんぱく交歓研修会&ジュニア・リーダー体験セミナーinかみのやま」と形を変えながら続いています。毎年11月上旬には、両市でそれぞれに開かれる物産祭りにおいて、郷土の食材を並べた相互産直市を開催しています。

また、熊野三山（本宮・新宮・那智）が祀られ東北の熊野と呼ばれる名取市は、起源である紀州の熊野神社所在である和歌山県新宮市と平成20年に姉妹都市盟約を結び、活発な交流をしています。毎年夏に新宮市で行っている自然学校「土と水と緑の学校」へ子どもたちを派遣するなど、活発な地域間交流が続いています。

親から子へ孫へ、  
名取の心とともに  
継承される伝統の文化・営み。

地域の振興を願う人々の努力によって、平成2年に公民館の「和太鼓教室」として出発。これをきっかけに「関上太鼓保存会」が誕生しました。日本の伝統文化を取り入れた新しい地域文化の創造が継承されています。

また、子どもたちは、多くの先人たちによって築き培われてきた社会や文化を豊かに発展させ、次世代に継承していく大切な役割を持つとともに、活力ある社会をつくる地域の担い手です。郷土芸能の伝承活動が続ける「花町神楽保存の会」による地元小中学校での神楽指導や、市内各小学校による一年を通しての実習田での農業体験などは、学校の恒例行事として定着し、子どもたちにも大好評です。地域産業への理解と地産地消の促進を目的に行われている「なとり・ぐるっと親子講座」と称する農業体験にも多数の市民が参加するなど、まちの豊かな地域資源と文化を活用し、人と自然、人と人とのつながりを通して郷土を学ぶ、こうした名取市の世代間交流活動は、地域コミュニティの実践として市内外からも高く評価されています。

# 共に支え 助け合う力が生む、 まちの元気と安らぎ。



地区民体育大会



子育て支援(ファミリーフェスティバル)



幼児健診



児童センター(工作タイム)



老人スポーツ大会



介護予防教室

体育館に響く高齢者の笑い声、児童センターを包む子どもたちの笑顔…。名取のまちには、元気な笑顔があふれています。住み慣れた地域社会の中で、誰もが安心して暮らしていけるよう、市民、各事業所・団体、行政が協働により支え合いながら地域福祉の向上に取り組んでいます。時代が変わっても、時に色あせることなく変わらない、名取の人の温もりやふれあいを大切にしたい。それが、魅力と元気あふれるまち・名取に住む私たち市民の願いです。

※住みよさ東北No.1都市…(株)東洋経済新報社が全国の市を対象に行っている「住みよさランキング」北海道・東北ブロックにおいて、名取市が平成22年・24年・25年と3回連続(平成23年は東日本大震災により非公表で1位となりました)。

## 福祉先進都市としての 実績を礎に、 地域ぐるみの体制づくりへ。

名取市は、昭和35年全国にさきがけて胃腸病予防総合検診を実施したことをはじめ、昭和48年点字広報など創刊、昭和49年には全国で2番目、県内のトップをきって寝たきり高齢者巡回入浴車を導入、そして平成8年には県内で初めて、寝たきり高齢者や障がい者に対して、行政と歯科医師会が一緒になって訪問歯科診療を開始。平成9年10月より、医師が不在となる土曜日の午後・日曜日・祝日・年末年始の医療を確保するため、名取市休日夜間急患センターを開設しました。

昭和50年4月からは市内保育所に専任の保育士を配置し、東北で最初の障がい児保育を実施、6年後には全保育所に範囲を拡大する他、保育所の延長保育導入や子育て支援センター、ファミリー・サポート・センターの設置、小学校単位での児童センターの建設などに取り組んできました。

現在は、子育て世代の増加から、市民の多様な保育ニーズに応えるため、保育所・幼稚園・認定こども園などの受入態勢を整備し、一時保育、特定保育、病後児保育事業の展開などのサービス向上を図っています。また、高齢者が地域で自立した生活を営めるよう、医療・介護・予防・住まい・生活支援サービスが切れ目なく提供される地域包括ケアシステムの実現に向けた取り組みを進めています。

## 共に支え合う「共助」による、 地域に根ざした 子育て支援・高齢者福祉

名取市には、子育て支援や障がい者支援、高齢者福祉などに携わっている市民ボランティアが数多くいます。また、子育ての相互援助活動であるファミリー・サポートセンターの協力会員や、児童センターの活動ボランティアとして活躍している方もいます。

また、地域で家庭教育を応援する「家庭教育推進事業」にも積極的に取り組んでいます。子育てサポーターで構成された家庭教育支援チーム「ほっほはうす」は、市内公民館や小中学校で家庭教育講座を開催。子育てに関する学習機会や情報の提供を中心とした活動を行っています。

また、急速に進む高齢社会の本格化に対しても、積極的な取り組みを行っており、高齢者福祉の核として、市内3カ所に「地域包括支援センター」を設置。主任ケアマネージャー・社会福祉士・保健師等を配し、地域の高齢者を包括的に支援するため、介護予防・福祉・医療などの総合的な相談体制を整えています。東日本大震災以降は、被災した高齢者支援や在宅支援サービス  
の充実にも取り組んでいます。



家庭教育支援チーム「ほっほはうす」

# NatoriBrand

## 全国に名をはせる名取ブランド

恵み豊かな名取市には、名取ブランドとして全国でも高い評価を得ている海の幸、里の幸、山の幸が数多くあります。歴史を築いてきた郷土の先達の志に学び、創意工夫を凝らして情熱を傾ける生産者の熱意とたゆまぬ努力から生み出されています。それが「名取ブランド」の数々です。



### 赤貝(アカガイ)

高級寿司ネタとして有名な閉上産アカガイは、身が厚く濃厚な味と品質で珍重されてきた。震災後、閉上漁港で操業を再開し、ブランド復活に精を出している



### セリ

名取市では江戸時代より自生していたものの、370余年前に彦六なる人がセリの原種の改良を重ね、育成・栽培に成功。良質な水の確保が栽培の条件であるセリの全国屈指の生産地に。全国的にも珍しいミョウガタケやタケノコなど、古くから伝統野菜の産地としても有名



### カーネーション

県内有数の生産量を誇るバラやスターチスなど、施設園芸の産地となった名取市。なかでも名取ブランドとして全国的に有名なのが、カーネーション。津波の塩害を乗り越え、ブランド復活を進めている



緑豊かなモミ、ウラジロガシ、ナラなど豊かな緑に恵まれた高館山。名取市を一望できる高館山自然レクリエーション施設には、市外からも多くの家族連れが訪れる憩いのスポット



国指定重要文化財・洞口家住宅は、寄棟造・茅葺・石場建ての母屋で旧仙台領内最大規模の農家。屋敷内には、茅葺の表門(長屋門)と馬屋の他、米蔵・座敷蔵・味噌蔵が配されている



光源氏のモデルといわれる中古三十六歌仙の一人、藤原実方朝臣を偲ぶ墓前献詠会は年1回行われ、全国から詠み人が集まる



震災の津波で壊滅的な被害を受けた閉上の名物だったゆりあげ港朝市。震災からわずか16日後に朝市を再開。復興のシンボルとして、毎週日曜・祝日元気に開催中



東日本大震災で亡くなった方々への鎮魂と復興への願いを込めて開催するなとり夏まつり。夜空を染める花火、全国から寄せられた絵灯籠も展示される

## PHOTO GALLERY

# 名取点描

ひと・コト・自然で綴る



### 名取市文化会館

コンサート、演劇などのイベントの他、市民の自主企画講座や集いでも幅広く利用される名取市文化会館。横文彦さん設計で、全国の建築ファンを魅了している



### 閉上土手の松並(あんどん松)

伊達藩が遠州から取り寄せて植えたと言われる市の登録文化財・閉上土手の松並(あんどん松)。名取川南側堤防沿いに約140メートル続くクロマツ46本は、津波に耐え1本も欠けることなく、震災前と同じ姿をとどめている



### 雷神山古墳

東北最大を誇る雷神山古墳は、市内中央に位置する愛鳥丘陵にある前方後円墳で、国指定の史跡。古墳周辺は史跡公園として整備され、広く市民に親しまれている



豊かな緑と水辺空間を生かしたサッポロビール仙台工場ビオトープ園。マガモ、キジバト、サギなどの野鳥が飛来し、花が咲き誇る周遊路もあるので散策に格好の場所



仙台空港アクセス線沿いのなとりりんくうタウンに所在する大型ショッピングセンター・イオンモール名取。杜せきのした駅とペDESTリアンデッキで直結している



震災の影響を大きく受けた閉上地区。地域住民の復興の願いが込められた仮設店舗が閉上さいかい市場。30店以上が軒を並べ、地域を元気にしている



公民館の和太鼓教室に通った生徒たちが保存会を設立。オリジナル曲として完成した「閉上大漁太鼓」。市内内外演奏活動を展開し、平成8年にはカムチャッカでの公演も行った



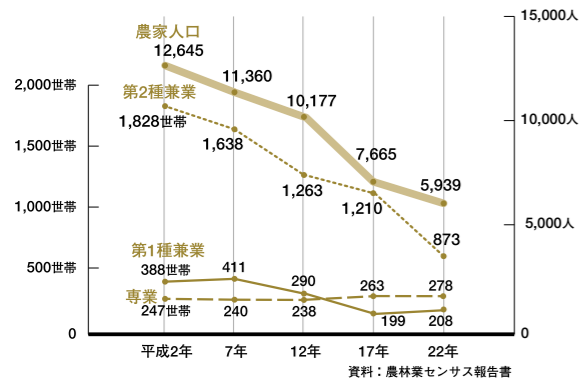
古くは名取一体に見られた代表的な民家が今もそのままに。国重要文化財・旧中沢家住宅は寄棟造、茅葺、石場建てで、内部は平面が田の字型の四間取りの名取型と呼ばれる特徴的な形



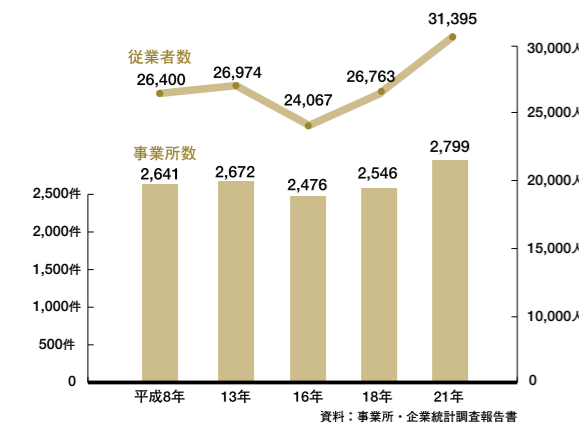
緑の山々に囲まれ、ドライブコースに最適な樽水ダムは、市民の水がめとして昭和51年に完成。四季の表情豊かな景観が見事で、ゲンジ蛭も生息する自然豊かな地

# 名取のすがた

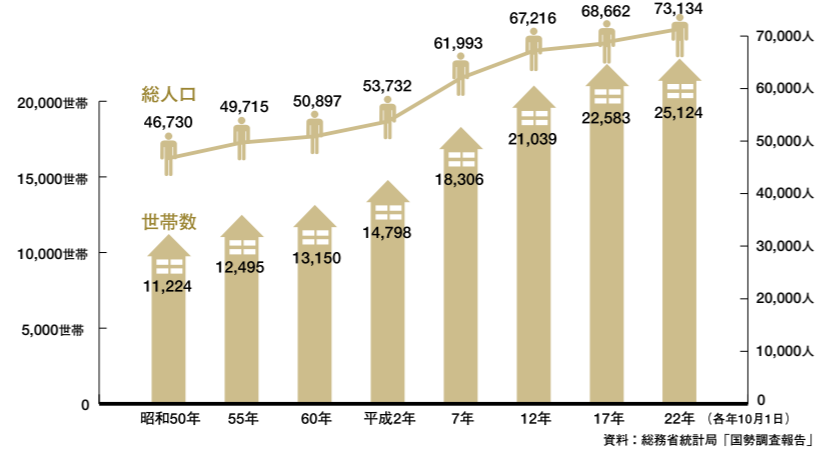
## 農家数・農家人口の推移



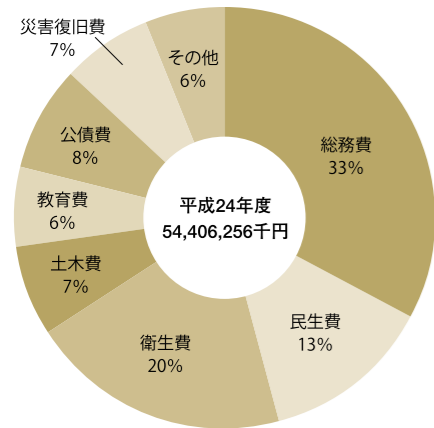
## 事業所・従業者数の推移



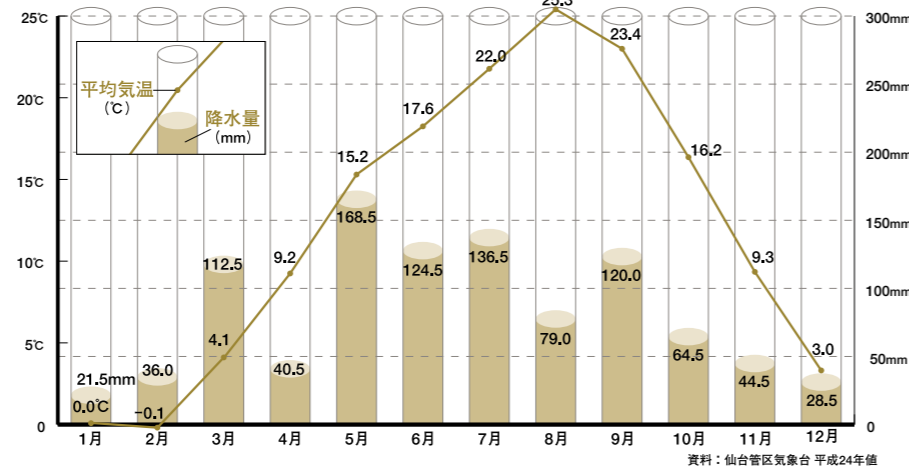
## 人口と世帯数の推移



## 一般会計歳出決算額



## 気温と降水量



<b>転入</b> 1日に 11.7人	<b>転出</b> 1日に 8.6人	<b>世帯人員</b> 1世帯 2.9人 (平成22年度国勢調査)	<b>人口密度</b> 1km <sup>2</sup> 731人 (平成22年度国勢調査)	<b>出生</b> 1日に 1.8人	<b>死亡</b> 1日に 1.5人	<b>結婚</b> 1日に 1組	<b>離婚</b> 1日に 0.3組
<b>水道給水量</b> 1人1日当たり 272ℓ	<b>仙台空港</b> 1日に(乗客) 7,305人	<b>JR名取・館腰駅</b> 仙台空港アクセス鉄道 1日平均(乗客) 15,292人	<b>予算</b> 1人当たり 571,906円 (平成24年度一般会計当初予算)	<b>交通事故</b> 1日に 1.2件	<b>火災</b> 1日に 0.07件	<b>救急出動</b> 1日に 7.6件	<b>ゴミ収集量</b> 1日に 70.6t

平成24年度資料

## History of Natori



# 悠久のこころ、継いで。

名取市は、国指定史跡の飯野坂古墳群や雷神山古墳をはじめ、実方中将の墓、熊野三社、道祖神社などの貴重な文化遺産を持つ、宮城県内でも有数の歴史あるまちです。



**万葉の面影を今に残す、  
中将・藤原実方朝臣ゆかりの地。**

源氏物語の主人公・光源氏のモデルともいわれる、中古三十六歌仙の一人、藤原実方朝臣。「歌枕見て参れ」との一条天皇の勅命により、みちのく各地の名所旧跡を訪ね歩く中、名取郡笠島道祖神の前を通り過ぎようとする際、村人に道祖神の祈願を薦められるも無視して通り過ぎようとする馬が暴れ落馬し、それがもとで998年に、ここ名取の地で命を落としました。名取市には、実方中将の墓所をはじめ、実方顕彰の歌碑

やゆかりの地名が今も残っています。

**実方から西行・芭蕉へと続く、  
歌に詠まれた「歴史の道」**

後世になり、実方中将の悲運の死を哀悼し、西行法師は名取の地を詣で、「朽ちもせぬ その名ばかりを 留めおきて 枯野の



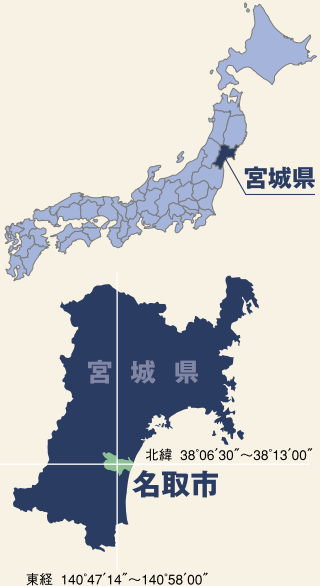
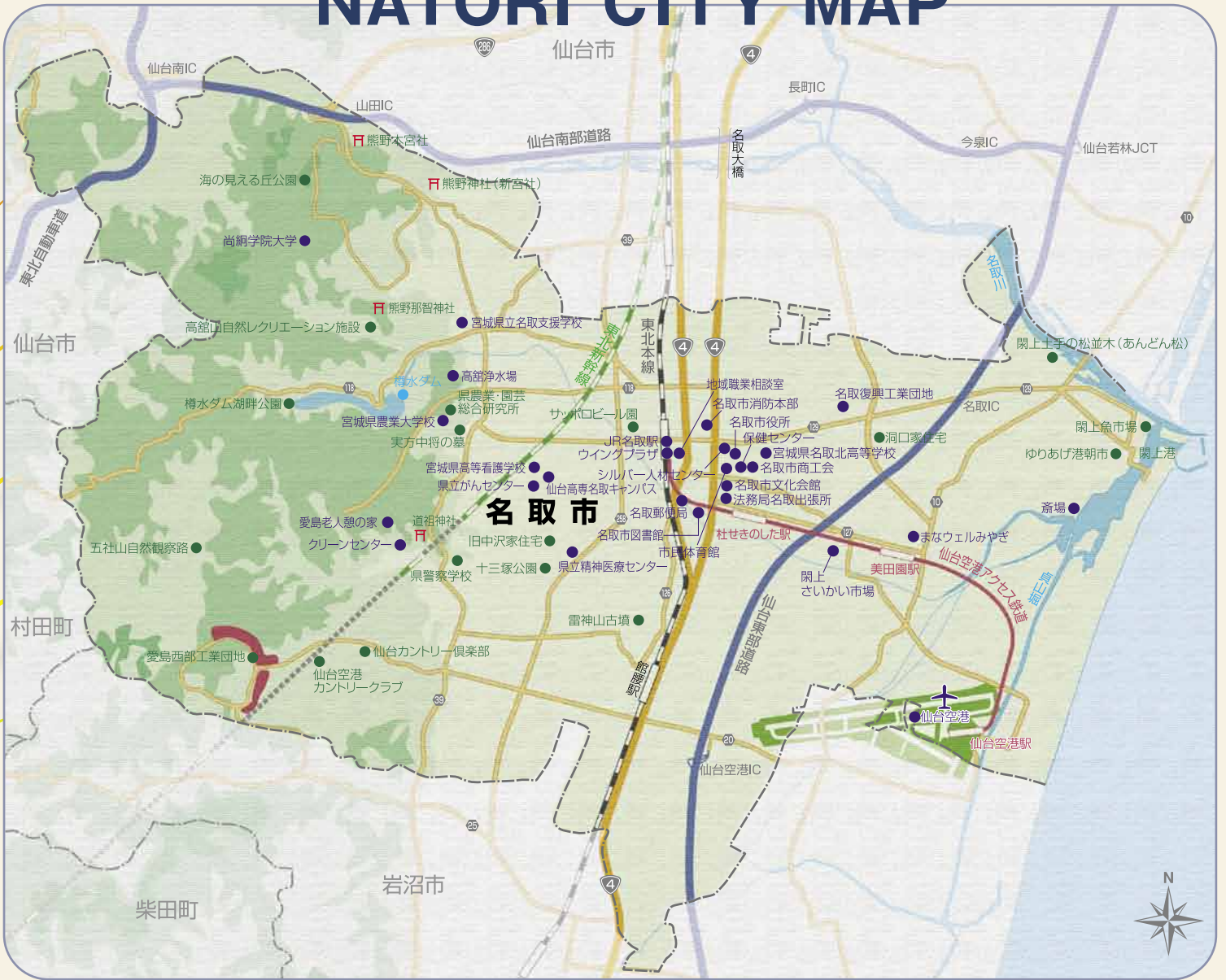
すすぎ かたみにぞ見る」と歌い、また松尾芭蕉は「奥の細道」で「笠島はいずこ 皐月のぬかり道」と一句詠んでいます。芭蕉は、白河の関を越え、旅を重ねて白石に一泊した翌日、「笠島郡に入る」と奥の細道に記すほどで、名取の笠島道祖神によって結ばれる実方中将と西行法師への思慕の情がいかに強かったかがうかがえます。

**自然崇拜と作物豊饒の祈り。  
伝え継がれる熊野信仰。**

名取市には、中世の東北における熊野信仰の中心として栄華を極めた熊野三社があり、今も例祭には伝統的な神楽が奉納演舞され、人々の信仰を集めています。名取の熊野三社は平安末期にはすでに存在していたと考えられ、南北3キロメートルに及ぶ範囲に本宮、新宮、那智社の三社が独立して勧請されていること、また紀州熊野三社をとりまく景観によく似た地域が選定されていることなどから、まさに東北の熊野信仰の地として崇められてきました。熊野堂神楽と舞楽は県指定文化財の伝統芸能です。



# NATORI CITY MAP 名取市シティマップ



## 名取市交通アクセス

**[車]**

東北自動車道／  
仙台南IC下車

仙台東部道路／  
名取IC・仙台空港IC下車

**[電車]**

JR仙台駅

- 東北本線 (11分) | 仙台空港アクセス鉄道 (JR仙台駅～仙台空港駅間 快速17分)
- JR名取駅 (3分) | 杜せきのした駅 | 美田園駅
- JR館腰駅 | 仙台空港駅

JR東京駅

	札幌	成田	小松	名古屋	大阪 (伊丹・関西)	広島	福岡	沖縄	
国内線	1時間10分	1時間	1時間	1時間10分	1時間10分	1時間20分	1時間40分	2時間30分	
	<b>仙台空港</b>								
国際線	2時間10分	9時間25分	4時間	6時間	5時間55分	2時間50分	3時間10分	2時間	
	ソウル	ホノルル	グアム	バンコク	北京 ※	上海 ※	大連 ※	長春 ※	台北

※平成26年1月現在運休

### 名取市市勢要覧

#### 【人口増加を続ける魅力満彩都市】

平成26年1月発行  
 発行／宮城県名取市  
 981-1292 宮城県名取市増田字柳田80  
 TEL : 022-384-2111 FAX : 022-384-4192  
<http://www.city.natori.miyagi.jp/>  
 企画編集／名取市 総務部 市政情報課  
 制作・印刷／凸版印刷株式会社 東日本事業本部

©本紙は環境にやさしい再生紙を使用しています。